國學院大學学術情報リポジトリ

『源氏物語』玉鬘十帖の構造再考：本当に後記か？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 『源氏物語』, 玉鬘十帖, 構造解析, 巻序, 季の巡り キーワード (En): 作成者: 山田, 利博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000295

『源氏物語』玉鬘十帖の構造再考

――本当に後記か？――

山田利博

論文要旨

稿者はこれまで玉鬘十帖に関連するものとして、その最初と最後にも描かれる「初瀬」と「石山」及び「男踏歌」が対照構造となっており、それらの場面を重ね合わせることにより一つのテーマが読み取れるよう仕組まれていること、そのテーマの一つが玉鬘の移動による六条院栄華の実相を描くことであることを、計四つの論で証してきた。しかしながら「初瀬」と「石山」及び「男踏歌」に関する論は確かに玉鬘十帖とも関わるけれども物語全体に話は及び、後の二つは、一応玉鬘十帖に限定して論じてはいるが、どちらかと言うと人物論となっている。またそれらの後で気づいたこと等もあり、既に講義では語っているので、これらの論考と聊か重複するところはあるけれども今回はそれを「構造」として論じたい。それは現在も続く「玉鬘系後記説」論争に参戦することともなるはずで、サブタイトルに謳ったように、現行巻序のまま読んで差し支えないことを結論とする。

【キーワード】『源氏物語』　玉鬘十帖　構造解析　巻序　季の巡り

はじめに

稿者はこの問題に関する論考として、『源氏物語』における初瀬と石山―玉鬘物語と浮舟物語をめぐって―[1]、「源氏物語における男踏歌―その対照的方法について―[2]」、「六条院における玉鬘―繁栄の象徴としての役割について―[3]」及び「玉鬘の流離と幸運――玉鬘と

以後の巻々[4]――」の四つを既に発表している。しかしながら最初の二つは、純粋に『源氏物語』に散見する「初瀬」と「石山」の用例（「初瀬」が玉鬘巻・椎本巻・宿木巻・東屋巻・浮舟巻・手習巻・夢浮橋巻の七巻十九例、「石山」が関屋巻・真木柱巻・浮舟巻・蜻蛉巻の四巻九例）、及び「男踏歌」（末摘花巻・初音巻・真木柱巻・竹河巻の四巻）の法則性を考える興味から出発したものであった。傍線を付したようにその中には玉鬘十帖中の巻々も含まれており、そこに存在する「法則」も後に触れるように決して例外ではないが、あくまで物語全体での法則性をあぶり出すことが目的であったため、玉鬘十帖に限定した物言いはしていない。

最後の一つはそういうタイトルの依頼論文であったため確実に意識していたし、それはその元となる三つ目の拙稿の頃から既に自覚されてはいたのだが、紙幅の制約もあり、自分の頭の中では分かっていたけれども、他人に理解できるよう論述できたかどうかは心許ない。幸いこの紀要は紙幅に大分余裕があるので拙論を丁寧に説明することは可能であるし、前に上げた諸稿の後で気づいたことどもあって、講義等では既に断片的に話しており、この辺りでそれを文字化してまとめておくことも意味のないことではあるまいと思う。それゆえ本稿は以前の稿と大分重複するところもあるのだが、そうした事情のものとしてご海容頂きたい。

拙稿の補説（1）

玉鬘十帖という呼称がいつ始まったかは定かでない[5]が、平安末には成立した、現存する『源氏物語』の最古の注釈書である『源氏釈』にも、「十七　たまかつら」、「ならひはつね」とある[6]から、この十巻がひとまとまり[7]というのは、相当古くから認識されていたものであろう。ただこの「並びの巻とは何か」を考え始めると、それはまた別の論文一編分の紙幅が必要であるし、今のところこれまでの説以上の材料は持っていないので、本稿では玉上琢彌「源語成立攷」（『源氏物語研究』　角川書店　一九八二年版）の「一まとめに発表された」ものという説に従っておく。そこにも言及があるように、『河海抄』が「凡ならひの本意は横たるへき也」と説いている[8]ことはもちろん承知しているが、これも玉上が指摘しているように、その『河海抄』自身が、末摘花・関屋・蓬生巻は、それぞれ前巻若紫、あるいは澪標と同時間帯の裏表を描くから横だが、空蟬巻は帚木巻の時間に続く時を描くから縦、玉鬘巻は一部分だけ前の巻々と重な

るから横縦を兼ねると説明しているのは如何にも苦しい。また、並びの巻は横が本義であることを示す他の証拠として上げられた『宇津保物語』と『浜松中納言物語』の並びの巻は、少なくとも前者については、『弘安源氏論議』十番に、「うつほの物語のならひ愚本にみさる所也かの物語もことはのつゝきおほつかなしまことにことはのにほひとみゆる所もあり又おもひかけさることをいへるもあり猶おほつかなし」[9]と、本によっては無いものもあったらしいし、その存在もあまり信じられていないようなので、注釈書間でほとんど異同がない『源氏物語』の並びの巻とは質を異にするようである。だとすれば、「凡ならひの本意は横たるへき也」と言える根拠は概ね消失し[10]、並びの巻とは物語内に描かれた時間の流れとはほぼ無縁となるので、それ以外の解答を探し求めると、結局玉上琢彌の考えに行きつくのである。

そのように、並びの巻を「一まとめ」と考えると、たとえ呼称は違っても、玉鬘から真木柱巻を一連のものとする考え方は、『源氏物語』成立の、かなり早い段階から存在したわけである。そのように考えれば、前節で上げた「初瀬と石山」及び「男踏歌」の用例が、ともに玉鬘十帖の始発である玉鬘巻及び初音巻、そして終末の真木柱巻に出現するという事実は極めて興味深いものとなってこよう。説明の都合上、まず「初瀬と石山」の用例から見る。

玉鬘十帖の実質的開始は、玉鬘と、もと玉鬘の母・夕顔の女房だったが、その死後は源氏に仕えている右近が初瀬観音の霊験により玉鬘巻で出会うことであるのは、既に先行研究が多数存在するし[11]、繰り返し強調されているので引用箇所も多くなるため、ここでは引用しない。しかしながら、真木柱巻に出てくる「石山」の用例は、ただ一度きりであるし、さりげなく書かれているから、見落とす向きも多いと思い、ここに掲げておく。

ほど経れど、いさゝかうちとけたる御けしきもなく、思はずにうき宿世なりけりと、思ひ入り給へるさまのたゆみなきを、いみじうつらしと思へど、おぼろけならぬ契りのほど、あはれにうれしく思ひ、見るまゝにめでたく、思ふさまなる御かたちありさまを、よそのものに見はてゝやみなましよと思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも弁のおもとをも、ならべていたゞかまほしう思へど、女君の深くものしとうとみにければ、えまじらはで籠りゐにけり。げにそこら心ぐるしげなることゞもを、とり〴〵に見しかど、心あさき人のためにぞ、寺の験もあらはれける。

（三―一一〇頁）[12]

一見冗談のように見えるかも知れないが、二本目の傍線のように、「寺の験」なる語が存在するから、当時としては至って真面目であろう。新大系のその箇所の注（一四）にもあるように、石山の仏の霊験に与ったのが鬚黒か弁のおもとか、古来説が分かれるのだが、本稿においてはどちらでも構わない。玉鬘の六条院の出入りに、ともに人外の力が関与していることをだけを押さえておけば充分だからである。そして女主人公（ヒロイン）の出入りに人外の力が関わるとなれば、真っ先に思い出されるのは『竹取物語』であろう。その意味で極めて興味深いのは、玉鬘十帖の始発に「異常成長譚のモチーフが影をおとした」と見る小林茂美の論[13]である。夕顔巻の時点ではおそらくその予定がなかった玉鬘を再登場させるため、夕顔巻から玉鬘巻の間に流れた約二〇年の歳月を一気に進める必要性があったことを考慮すれば、これは聊か「こじつけ」に見えるかも知れないが、例えば『宇津保物語』の仲忠の成長時に、「かかるほどに、この子は、すくすくと引き伸ぶるもののやうに大きになりぬ[14]」という描写が存在し、その頭注にも「異常な生育ぶりは神異の子の型の一つ」とあるように、男主人公（ヒーロー）・女主人公（ヒロイン）の成長には、多かれ少なかれこの傾向は含まれていると思う[15]ので、決して「こじつけ」ではないのである。そして先ほどの頭注に類例として上げられているように、いうまでもなくこれは『竹取物語』にも認められる。

稿者が玉鬘十帖と『竹取物語』の類似を最初に言い出した頃は、今となっては逆にあまり聞かなくなったが、筑紫と貴種流離譚という観点から、玉鬘十帖と『伊勢物語』のつながりを見るのが一般的[16]で、稿者が院生だったこともあり、後輩にまで「何故わざわざ『竹取物語』を考えなければならないのか」と詰め寄られたものである。しかしそのすぐ後、後藤祥子が『国文学』（學燈社　一九八七年一一月）の「共同討議・玉鬘十帖を読む」の中で同様の発言をされてから広く認められるようになり、先ほども述べたように今ではそれがほぼ通説となっていると思われるので安心して続けられるのだが、それを認めれば既に注（13）の小林論も指摘しているように、『竹取物語』と関係が深いと言われている『丹後国風土記逸文』の「奈具社」伝説まで視野に入ってくるのである。なぜならこの二つは、天人女房譚の中でも「養女型」と呼ばれるもの[17]であり、玉鬘も光源氏の養女となるからである。そして天人女房譚養女型は、やはり注（13）の小林も言っているように、「幸運を招来する尊貴女と結婚した長者が、その女性を追放し（和奈佐翁型）、離縁する（前掲の再婚型）ことで、零落してしまうモチーフの文学的転用とも見られるから[18]」である。

言うまでもなく「和奈佐翁」とは、「奈具社」伝説において天女を養女とし、後に追い出した翁で、光源氏は玉鬘と結婚しないから、

「離縁」もしないし、「追放」したわけでもなく、ただ別の男・鬚黒に盗られただけだが、玉鬘の移動に着目すれば、大筋似ていると言えよう。そう捉えれば、玉鬘十帖は光源氏の「幸運」の「招来」と「零落」を描くものというのが骨格として見えてくるわけである。そしてそれを証するものは幾つかある。「はじめに」で、本節で説明した「初瀬と石山の呼応」の問題とまとめて言及した、「男踏歌」について次節で見てみよう。

拙稿の補説（2）

「初瀬」と「石山」の用例同様、「男踏歌」の描写が、玉鬘十帖の第二巻、すなわち始発に極めて近い初音巻と、最終巻・真木柱巻に存在することは、既に「はじめに」で述べてある。問題はこれが如何に光源氏の「幸運」に関わるかであるが、それには二つの描写の比較が必要となるので次に掲げる。

ことしは男踏歌あり。うちより朱雀院にまいりて、次にこの院にまいる。道の程とをくなどして、夜明け方になりにけり。月くもりなくすみまさりて、うす雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども、物の上手おほかる比をひにて、笛の音もいとおもしろうふきたてゝ、この御前はことに心づかひしたり。御方〳〵物見にわたり給ふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御つぼねしつゝ、おはさす。西の対の姫君は、寝殿の南の御方に渡り給て、こなたの姫君に御対面ありけり。上も一所におはしませば、御木帳ばかりへだてゝきこえ給ふ。

朱雀院の后の御方など、めぐりける程に、夜もやう〳〵明けゆけば、水駅にて事そがせ給ふべきを、例ある事より外に、さまことにことくはへて、いみじくもてはやさせ給ふ。

（二一―三八九～三九〇頁）

踏歌は方〴〵に里人まいり、さまことに、けに、にぎわゝしき見物なれば、たれも〳〵きよらをつくし、袖口の重なり、こちたく、めでたくとゝのへ給。春宮の女御も、いとはなやかにもてなし給て、宮はまだわかくおはしませど、すべていとまめかし。御前、中宮の御方、朱雀院とにまいりて、夜いたうふけにければ、六条の院には、このたびは、所せしとはぶき給。朱雀院よりか

へりまいりて、春宮の御方〳〵めぐるほどに夜明けぬ。　（三―一三三～一三四頁）

順に初音巻、真木柱巻のものである。注目すべきは傍線を付した、時刻にまつわる描写で、二つの男踏歌はほとんど同じコースを辿りながら[19]、初音巻では六条院にも来ているのに対し、真木柱巻では「朱雀院よりかへりまいりて、春宮の御方〳〵めぐるほどに夜明けぬ」とあることより、明らかに初音巻より時間が早いと思われるにも拘わらず、「六条の院には、このたびは、所せしとはぶき給」とあることである。これを玉上琢彌のように、

源氏は何事も小さいときから見なれていて、べつに感激もないから、何かというと返上する。一昨年は六条の院造営直後でにぎやかにやり、女連中にも見せてやったから、今度は結構と辞退する。ひとつは、せっかく参内させた玉鬘にはでなことをしてやろう、その時間を生み出すために、との計算もあったであろうか[20]。

と見るのも一つの解釈ではあろうが、前節で考えたことを踏まえれば、玉鬘を失った真木柱巻では、やはり源氏は「幸運」（＝栄華）をも失っているからだと見るのが正解ではなかろうか[21]。

もっともこれを先に指摘したは山中裕であり[22]、稿者はそれに、史料を詳細に調べると、男踏歌はそれまで言われていたような隔年開催ではなく不定期の臨時行事なので、言ってみればこの二箇所が例外なのであり、それはまさに光源氏がこの時点で栄華を失っているのを示すために描かれたのであろうこと、末摘花巻の男踏歌は、言葉だけで行事描写は無いから、結局男踏歌の実際描写が存するのは、この二巻と竹河巻だけとなり、言うまでもなくこれらに共通するのは玉鬘が登場することであるので、『源氏物語』の男踏歌は常に玉鬘とともにある、つまりは前節で述べた、玉鬘こそが栄華をもたらす存在と考えられることことを付け加えたのみである[23]。しかしながら二人とも同じ結論に達し、しかも注（21）に示したように、それは現在でもほぼ踏襲されているようであるから、これを光源氏の栄華の移動を示す第一の証拠とし、次節では第二の証拠に話題を移したい。それは物語における「季の巡り」である。

季の乱れ

前節まででも大分以前の稿を補ってきたが、いよいよここからは活字化していない部分になる。それは節のタイトルにもした「季の乱れ」である。

玉鬘十帖を一言で表すと、「玉鬘が六条院に入るところから出ていくまで」となるが、それはほぼ六条院新造の翌年ということになる。「ほぼ」というぼかした言い方をしたのは、玉鬘十帖に描かれる季節は次のようになっているからである。

玉鬘巻　→（夕顔巻に続く時から）六条院造営の年末まで（六条院は八月完成）
初音巻　→六条院造営翌年の正月（春）　胡蝶巻→同二・三月（春）
螢巻　→同五月（夏）　常夏巻→同六月（夏）
篝火巻　→同七月（秋）　野分巻→同八月（秋）
行幸巻　→同一二月から翌年二月（冬から春）　藤袴巻→行幸巻末と同年の八、九月（秋）
真木柱巻→藤袴巻と同年の一〇月から翌年一一月頃まで

玉鬘巻はあまりにも長年月を描くため、季節を決することは不可能なので敢えて書かなかったが、同様のことは最後の真木柱巻でも起こっている。玉鬘巻は、長年物語から忘れ去られていた玉鬘を再登場させるためには、こういう描き方をするのはやむを得ないと思うが、真木柱巻には特段そういう理由はないはずである。ではどうしてこういうことになっているのであろうか。それを解く手がかりは他の巻の季節の流れにあると思う。

このように書けば一目瞭然であろうが、初音巻から始まる六条院造営後の一年は、最初のうちは各季節二巻ずつという、規則正しい流れを示すが、野分巻を節目としてそれが崩れ出す。そう言えば『源氏物語』に少し詳しい向きなら思い当たることがあろうが、言うまでもなく野分巻は、伊藤博の有名な論[2]以降、光源氏の相対化が始まる巻として既に定説化されている。では光源氏が相対化されると何故季節が乱れ出すのかと言えば、それも同じく『源氏物語』に少し詳しい向きならピンとくるだろうが、六条院は四方四季の調和に

よって成り立つ[25]「生ける仏の御国」だからである。すなわち、光源氏の権威が保たれているうちは、季節も整然と推移するが、それが不安定になると、季節の変化も崩れていくことをこれは表現しているのではなかろうか。

では何故光源氏の相対化が始まるかと言えば、これも先ほどの伊藤論から定説化している、野分巻の次のような描写からである。

近くゐ給ひて、例の風につけても、おなじ筋にむつかしうきこえたはぶれ給へば、たえずうたてと思ひて、かう心うければこそ、こよひの風にもあくがれなまほしく侍つれと、むつかり給へば、いとよくうちわらひ給ひて、風につきてあくがれたまはむや、かる〴しからむ。さりともとまる方ありなむかし。やう〳かゝる御心むけこそ添ひにけれ。ことはりやとのたまへば、げにうち思ひのまゝにきこえてけるかなと思して、みづからもうちゑみ給へる、いとおかしきいろあひつらつきなり。ほをづきなどいふめるやうに、ふくらかにて髪のかゝれるひま〳、うつくしう思ゆ。まみのあまりわらゝかなるぞ、いとしも品たかく見えざりける。そのほかは、つゆ難つくべうもあらず。

中将いとこまやかにきこえ給を、いかでこの御かたち見てしかなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るゝものどもゝ取りやりたれば、いと良く見ゆ。かくたはぶれ給けしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐はなれず、もの近かべきほどかはと、目とまりぬ。見やつけたまはむと、おそろしけれど、あやしきに心もおどろきて、猶見れば、柱隠れにすこしそばみ給へりつるを、ひきよせ給へるに御ぐしのなみよりて、はら〳とこぼれかゝりたるほど、女もいとむつかしく、くるしと思ふたまへるけしきながら、さすがにいとなごやかなるさまして、よりかゝり給へるは、ことゝ馴れ〳しきにこそあめれ。いであなうたて、いかなることにかあらむ、おもひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見慣れ生ほしたて給はぬは、かゝる御思ひ添い給へるなめり、むべなりけりや、あなうとましと思ふ心もはづかし。

（三―四七～四八頁）

真に必要なのは第二段落以降だが、そこからだと状況が分かりにくいかと思い、かなり長く引用してしまった。諒とせられたい。傍線部から分かるように、夕霧が光源氏を「批判」（＝相対化）したのは実の親が娘に懸想めいたことをしていたためだが、もちろん夕霧にはこの時点で知らされていなかっただけで、二人は実の親子ではないので、その点は幾分緩和されよう。しかし後に引用する玉鬘

の態度や、時代が下るけれども『有明の別れ』で連れ子と関係する左大将の描写等から、当時としてもやはり不道徳のそしりを免れないものではあったろう。では源氏のこうした態度は何時から始まったかと言えば、先ほどの「季の乱れ」と軌を一にするのである。順に見ていこう。

玉鬘巻で彼女を養女として引き取る決意をした時は、無意識下はともかく、意識的にはあくまで養女としてであった。

さらば、かの人このわたりに、渡いたてまつらん。年頃もの、ついでごとに、くちおしうまどはしつる事を思出でつるに、いとうれしく聞出でながら、いま、でおぼつかなきもかひなきことになむ。父おとゞには何か知られん。いとあまたもてさはがるめるが、数ならでいまはじめ立ち交じりたらんが、中〳〵なる事こそあらめ。われはかうさう〴〵しきに、おぼえぬ所より尋ね出したるとも言はんかし。すきものどもの心つくさするくさはひにて、いといたうもてなさむ　（二一―三五八頁）

要約すれば、夕顔の死の紛れに行方不明にしてしまったことをずっと後悔してきたが、無事見つけ出せたのだから、思わぬ所から落胤を見つけ出したことにして、「すきものどもの心つくさするくさはひ」として引き取ろう（＝おそらく自分自身は求婚者として想定していない）と言っているのだから、これは紛れもなく「父」の思考である。それは次の初音巻でも基本的には変わらない。

かくいとへだてなく見奉りなれ給へど、猶思ふにへだゝりおほくあやしきが、うつゝの心ちもし給はねば、まほならずもてなし給へるもいとおかし。年ごろになりぬる心ちして、見奉るにも心やすく、ほいかなひぬるを、つゝみなくもてなし給て、あなたなどにもわたり給へかし。いはけなきうい琴ならふ人もあめるを、もろともにきゝならし給へ。うしろめたくあはつけき心もたる人なき所なりときこえ給へば、のたまはせむまゝにこそはときこえ給ふ。さもある事ぞかし。　（二一―三八二頁）

ここでは、「うい琴ならふ人」（＝自分の実娘の明石姫君）と同じ扱いをしているのだから、これもまた「父の心」であろう。それゆえ玉鬘も、「さもある事ぞかし」と語り手に評されるように、「のたまはせむまゝにこそは」と、ごく自然な返答をしている。

その様相が少し変わってくるのが次巻・胡蝶巻である。

きこえ給人いとあまたものし給。されどおとゞ、おぼろけにおぼし定むべくもあらず。わが御心にも、すくよかに親がりはつまじき御心やそふらむ、父おとゞにも知らせやしてましなど、思しよるおり〳〵もあり。　（二一―四〇七頁）

そしてこのことに基づき次のような描写が現れる。

おぼすさまのことはまばゆければ、えうち出で給はず。けしきある言葉はとき〴〵まぜ給へど、見しらぬさまなれば、すゞろにうちなげかれてわたり給。

（二一―四一二～四一三頁）

つまり、はっきりしたことはさすがに気恥づかしくて言い出せないので、それらしい言葉を時々交ぜるのだが、玉鬘は知ってか知らずか（前後の描写を見ると、多分夢にも思っていなかったと理解すべきと思う）、気づかない様子なので、源氏は嘆きながら帰るわけである。しかし、とうとうそれが破れる時がやってくる。

なごやかなるけはひの、ふと昔おぼしいでらるゝにも忍びがたくて、見初めたてまつりしは、いとかうしもおぼえ給はずと思ひしを、あやしうたゞそれかとおもひまがへらるゝおり〳〵こそあれ。あはれなるわざなりけり。中将のさらに昔ざまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もゝのしたまうけるよとて、涙ぐみ給へり。

箱のふたなる御くだものゝなかに橘のあるをまさぐりて、

橘のかほりし袖によそふれば変はれる身ともおもほえぬかな

世とゝもの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年頃をかくて見たてまつるは、ゆめにやとのみ思ひなすを、なをえこそ忍ぶまじけれ。おぼしうとむなよとて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひ給はざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものし給ふ。

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひて、うつぶし給へるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶ〳〵と肥ゑ給へる身なり。肌つきのこまやかにうつくしげなるに、中〳〵なるものおもひそふこゝちしたまて、けふはすこし思ふこと聞こえしらせ給ひける。女は心うく、いかにせむとおぼえて、わなゝかるけしきもしるけれど、何かかくうとましとは思いたる。いとよくもてかくして、人にとがめらるべくもあらぬ心のほどぞよ。さりげなくてを、もてかくし給へ。浅くも思きこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじきこゝちなんするを、このをとづれきこゆる人〳〵には、思しおとすべくやはある。いとかうふかき心ある人は、世にありが

たかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそとのたまふ。いとさかしらなる御おや心なりかし。（二―四一五～四一六頁）

転換点としてここは重要な場面なので少々長く引いてしまったが、要は玉鬘があまりにも夕顔に似ていたので源氏は遂にこらえきれず、告白してしまうという場面である。もちろん玉鬘は寝耳に水で、そうは言ってもさすがに賢い彼女らしく、「おほどかなるさま」で断る。すると源氏は、親の愛情にまた新たな愛が加わるのだから、自分ほどあなたを愛している者はいない、だから他の男に渡すのは心配だという、「いとさかしらなる御おや心」と語り手に評される屁理屈でさらに迫ってくる。

以下、「いろにゐでたまひてのちは太田の松のと思はせたることなく、むつかしうきこえ給ことおほかれば、いとゞところせきこゝちして、をき所なきものおもひつきて、いとなやましうさへし給ふ」（二―四一九頁）という、玉鬘の苦悶の日々が始まるのだが、それを逐一追いかける紙幅の余裕はさすがにない。ただ、告白はしたものの、光源氏自身も「まことにゆかしげなきさまにはもてなしはてじ」（螢巻・二―四三一～四三二頁）と自制するのでこれ以上事態は進まず、一方玉鬘の方も、「はじめこそむくつけく、うたてとも思ひ給しか、かくてもなだらかに、うしろめたき御心はあらざりけりと、やう〳〵目馴れて、いとしもうとみきこえ給はず、さるべき御いらへも馴れ〳〵しからぬほどに聞こえかはしなどして」（常夏巻・三―一三頁）、源氏に対して若干の好意を持ち出すので、遂に二人の関係は、次のように、篝火巻で琴を枕に共寝をするところまでいく。

秋になりぬ。初風すゞしく吹きいでてて、背子が衣もうらさびしき心ちしたまふに、忍びかねつゝ、いとしば〳〵渡り給ておはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえ給ふ。五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠るゝけしき、荻の音もやう〳〵あはれなる程になりにけり。御琴をまくらにて、もろともにそひふし給へり。

（三―二九～三〇頁）

二人が男女の関係にならない限り、これ以上の進展はあり得ないわけで、これは正しく二人の関係の頂点と言えよう。この直後に、先ほどの野分巻で戯れる二人の姿を夕霧が垣間見るシーンが来る。まさにこれは「拙稿の補説（1）」で確認した、「養親の慢心の結果が幸運の喪失の原因となる」天人女房譚養女型の話型と同一であるように見えないであろうか。以上のことを総合して、玉鬘十帖は天人女房譚養女型、就中『竹取物語』を踏まえて光源氏が六条院栄華（＝玉鬘）を手に入れるところから失うまでを描いたもので、その

十帖の季の推移は、それを目に見える形で読者に示す方法であったと結論する。しかしながら『源氏物語』における「季の乱れ」は、玉鬘十帖に限ったものではなく、この後も幾つか描かれる。それを押さえると、例の有名な「玉鬘系後記説[28]」を考える上で一つの手がかりが得られると思うので、続いてそれを見てみよう。

玉鬘十帖「後」の「季の乱れ」

実はこの一部についても既に言及しているが[29]、論述の都合上再説しておけば、それは梅枝巻の「薫物合わせ」の場面である。

さらにいづれともなきなかに、斎院の御黒方、さ言へども心にくゝしづやかなるにほひことなり。侍従はおとゞの御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりとさだめ給。対の上の御は、三種あるなかに、梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやき心しらひをそへて、めづらしきかほりくはゝれり。この頃の風にたぐへんには、さらにこれにまさるにほひあらじとめで給。夏の御方には、人々のかう心〴〵にいどみ給なる中に、かず〳〵にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひきえ給へる御心にて、たゞ荷葉を一種あはせ給へり。さま変はり、しめやかなる香してあはれになつかし。

冬の御方にも、ときときによれるにほひの定まれるに、消たれんもあいなしとおぼして、薫衣香のほうのすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせ給て、公忠の朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩のほうなど思えて、世に似ず、なまめかしさをとりあつめたる心をきてすぐれたり……

（三―一五六頁）

最後の傍線部中に「ときときによれるにほひの定まれる」とあるように、薫物にはそれぞれ象徴する季がある。朝顔が合わせた黒方は冬、源氏が合わせた侍従は秋、紫上が合わせた梅花は春、花散里が合わせた荷葉は夏、明石御方が合わせた薫衣香は無季であるので、ここでも四季が揃っている。ただ、六条院は春を紫上、夏を花散里、秋を秋好、冬を明石御方がそれぞれ司り、それを源氏が宰領することによって調和（＝栄華）が保たれているはずであるから、ここはそれとは大きく食い違っているのが分かるであろう。秋好は中宮であるから、こうした催しに同列に加われず、その代わりを源氏が果たしていると見ることは一応できるのであるが、それとて秋は凋

落のイメージがあるからやや気になるところであるし、何より問題なのは、朝顔という、六条院外の存在が混じっていることである。無論これは源氏が依頼したからではあるのだが、見方を変えれば、そうした外部の者の力を借りないと、もはや調和が保てないとも言える。そして本来その季（＝冬）を合わせるべきであった明石御方は、「消たれんもあいなし」と思って、無季である薫衣香を合わせている。これも見方に依れば、季に縛られないことにより四季の上に立っていると見ることもでき、それは本来源氏が占めるべき場所であるから、匂宮巻の、「二条院とてつくりみがき、六条の院の春のおとゞとて世にのゝしる玉のうてなも、たゞひとりの御末のため成けりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御うしろみをしつゝ、あつかひきこえ給へり」（四―二一四頁）という記述を先取りして、既にここで密かに源氏に反旗を翻しているようにも見えるのである。残った紫上と花散里は、一見自己の季を忠実に守っているように見えるが、源氏が依頼したのは各人二種であった（三―一五二頁）はずだから、如何に理屈をつけようと、三種と一種では、やはり源氏の言葉に従っていないのである。この二人の行動の意味については、他日考えてみたいと思っているが、とにかくここでは、既に玉鬘を失ったためか、もはや源氏が六条院を宰領できていないことが、薫物が象徴する季の描写によって示されていることだけを押さえておきたい。

そして同様の「季の乱れ」が、若菜上巻の源氏の四十の賀にも認められることを、二〇二二年度中古文学会春季大会での國學院大學の大学院生・亀谷粧子の発表「紫の上と嵯峨野の御堂―『源氏物語』「若菜上」巻における光源氏の算賀を起点として―」[30]の資料中の表で気づかされた。亀谷の発表は、標題通り紫上の算賀のみに絞られていくのだが、周知の通り光源氏の四十の賀は四回行われており、その主催者と行われた時を列記していけば次の通りである。初めは玉鬘で「正月廿三日」（三―二三四頁）、次は紫上で「神無月」（三―二六一頁）、三番目が秋好で「しはすの廿日あまり」（三―二六四頁）、最後が夕霧と冷泉で日付は明示されていないがその後（三―二六六頁）、つまり春が一つで冬が三つである。

これは源氏が賀を頑なに固辞したことにも依るし、別に賀は季節と直接には関わらない。しかし、「四」と言えば「四季」を連想してしまうのも事実だし、紫上と秋好は主催者となっているのにも拘わらず、彼女たちが賀を行えたのはそれぞれの季ではない[31]。それどころか、紫上は六条院春の町で賀を行うことも出来ず、行えたのは「嵯峨野の御堂」（三―二六一頁）と「我御わたくしのとのとおぼ

す二条院」（三―二六二頁）なのである。これは亀谷の言うとおり、もはや紫上は六条院から閉め出されつつあることが示されていると言えよう。つまりこの時点では「六条院の四季の調和」は完全に瓦解しているのであるが、その描かれ方は六条院外の者の闖入[32]と、季とそれを司る者の乖離であり、季の流れの変調ではない。すなわち類似するのは梅枝巻であって、決して玉鬘十帖ではないのである。

玉鬘系後記説に依れば、玉鬘十帖が成立するのは藤裏葉巻が書かれた後と推定されているから、それに従うと、季の乱れを描く方法は、「司る者との乖離」→「季の流れの変調」→「司る者との乖離」と変化したことになる。これとて絶対にあり得ないことではないが、「季の流れの変調」→「司る者との乖離」→「司る者との乖離」という変化を想定した方が自然であろう。ましてや梅枝巻の薫物合わせが、玉鬘を失った結果を前提としているのならばなおさらである。これらの理由から、本稿ではおそらく玉鬘十帖は後記されていず、現行の巻序で読んで差し支えないと結論するものである。

まとめ

以上、玉鬘十帖の構造を考えると、それが「後記」とは思えないことについて延々と述べてきたが、このことが即座に玉鬘系後記説の否定に繋がるわけではない。何故なら、玉鬘十帖とそれ以前の玉鬘系の巻々との異質性は、既に稲賀敬二[33]、楢原茂子[34]、中川照将[35]等が指摘しているからである。中でも稲賀が指摘する蓬生巻ではまだ兵部卿であった紫上の父を、少女巻以降の「式部卿」としているのがどうやら本来の本文らしい[36]という問題は大きい。稲賀はこれを以て、玉鬘十帖は後記でなかったとしても、後記された巻々はあったであろうとしているが、若紫巻で七巻先に登場する明石御方の話を書いた作者である（もちろん若紫巻は「後記」ではない）から、六巻先のことが、必ず形を成していなければならないかどうかは悩ましいところである。

同様に、そもそもの発端となった紫上系と玉鬘系に登場する人物の相違すら、藤井貞和により、「若菜上下巻以降の巻々にも人物の出入りがあって、それらを見てゆけば紫上系と玉鬘系の分離はなお可能」で、「たとえば指標人物の玉鬘女君を巻別に見ていくと、若菜上下巻に出、柏木巻に出たあと、光源氏生前の物語にはもうすがたをあらわすことがな」いから、「横笛、鈴虫、夕霧、御法、幻は

紫上系の巻々としてあ」り、「若菜上下巻は玉鬘の系譜からいえば直接に真木柱の巻を受けている。しかも若菜上下巻は真木柱の巻につづいて〝後記挿入〟されるといった体のものではけっしてな」いという、至極真っ当と思われる指摘がなされているので、やはり決定的な証拠とはなり得ないのである。[37] ただこれだけの引用だと、前節末で述べたように、「玉鬘系後記説に依れば、玉鬘十帖は藤裏葉巻の完成後に書かれたのだから、若菜上下巻が真木柱巻と直接繋がるのは当然だ」と思う向きもあるかも知れないが、長くなるし、問題が少しずれてくるので割愛したけれども、藤井はこのあと竹河巻の存在と、真木柱と鬚黒への言及が紅梅、竹河巻にあり、宿木巻も真木柱の娘・宮の君が登場するからこれらの巻は玉鬘系なのではないか、つまり紫上系と玉鬘系は「『源氏物語』の最終にいたるまであるのではないか」と考察を続ける。[38] これが正しいとすれば、紅梅、竹河巻はまだしも、宿木巻が後記とはやはり思えないし、前述したように、そもそも後記説は登場人物の相違から出発したはずである。同じ論理で説明が出来ないという時点で、その説はやはり成り立たないのではなかろうか。[39]

それ以上の新知見は今のところ有していないので、それらについて論じることは他日を期したいが、所詮内部徴証だけでは成立の問題を決定し得ないという結論を以て、本稿を閉じたいと思う。

注

(1)『国文学研究』第八十七集　一九八五年一〇月。後に「初瀬と石山の呼応」と改題し、拙著『源氏物語解析』(明治書院　二〇一〇年。以下「拙著」とはこれを言う)第一部第二章第二節に収めた。

(2)『中古文学論攷』第七号　一九八六年一〇月。後に「男踏歌の対照」と改題し、拙著第一部第二章第三節に収めた。

(3)『中古文学論攷』第八号　一九八七年一二月。後に「玉鬘の造型」と改題し、拙著第一部第二章第四節に収めた。

(4) 今井卓爾・鬼束隆昭・後藤祥子・中野幸一編『源氏物語講座3』(勉誠社　一九九二年)。

(5) 有川武彦校訂『増註　源氏物語湖月抄』(名著普及會　増補版第二刷　一九八二年)上巻二四頁「一**巻々之次第**」に三光院実枝の説として、『源氏物語』

は『史記』に依り、本紀十二巻が桐壺から匂宮、世家三十巻が宇治十帖、列伝七十巻は並びの巻に相当すると書かれているので、「宇治十帖」という呼称はいわゆる「古注釈」の時代から存在したことが知られるが、「玉鬘十帖」はこの書にも存在しないし、他の「古注釈」でもおよそ見た記憶がないから、おそらく近代に入ってからの呼称ではないかと思う。武田宗俊の「源氏物語の最初の形態」（『源氏物語の研究』　岩波書店　一九五四年）では、「玉鬘以下十帖」という言い方が何度も繰り返された後、最後の方に一か所だけ「玉鬘十帖」という言い方が出てくる（三三頁）から、あるいはこの辺りが淵源かも知れない。

（6）『源氏物語大成』第七巻（中央公論社　一九八二年版）三〇七頁。

（7）正確には、「こてふ」以下の巻名には「ならひ」という語はなく、ただ、「こてふ」、「とこなつ」、……と記されているだけだが、「十八　むめかえ」とあるから、それ以前の巻々には全て「ならひ」という語がかかっているとみるべきだろう。但しその真木柱巻の後には「さくら人」巻も入っているので話は少し厄介だが、周知の如くその巻名の下には「このまきはあるほんもありなくてもありぬへしほたるかつきにあるへし」という注記があるので、「さくら人」巻はこの頃から不安定な位置づけとなっていると考えられることにより、通説に従って、本稿ではこの巻が存在したという説は採らない。

（8）玉上琢彌編『紫明抄　河海抄』（角川書店　一九七八年版）二三三頁。

（9）注（6）と同書五三四頁。

（10）したがって「かがやく日の宮」とか、「欠巻X」のような存在も考えない。何故ならそれは、「凡ならひの本意は横たるへき也」という考えを前提とし、時間的に帚木巻に後続する空蝉巻が並びの巻であるはずがないという思い込みに端を発している（うつせみ　二のならひとあれと　は丶木丶のつき也ならひとは見えす（第二次『奥入』　注（6）と同書三七〇頁）からで、その前提が崩れるなら、「もとよりな」い、そのような巻を想定する必然性もなくなるからである。

（11）例えば、柳井滋「源氏物語と霊験―浮舟物語の考察―」（阿部秋生編『源氏物語の研究』　東京大学出版会　一九七四年）及び「初瀬の観音の霊験」（『講座源氏物語の世界』第九集　有斐閣　一九八四年）等。

（12）本稿の『源氏物語』の本文引用は大島本をもとに読みやすいように私に校定し、検索の便に資するため、それを比較的忠実に翻刻した岩波の新日本古典文学大系本（新大系と略す）の巻・頁数により該当箇所を示した。これは混成本文に依るよりは一つの写本を忠実に読んだ方が良いという判断によ

るものだが、その「忠実に読むべき」写本が現在のところ不明であるので、あくまで便宜的に大島本に依っただけであり、別に大島本を最善と判断しているわけではない。

(13) 小林茂美「玉鬘―物語展開の原動質から―」(『源氏物語講座』第四巻　有精堂　一九七一年)二一九頁。

(14) 『うつほ物語』の引用は中野幸一校注・訳の新編日本古典文学全集による。一―七一頁。

(15) 私見に依れば桐壺巻も、一巻で一二年の歳月が経過するという、玉鬘巻を除けば、『源氏物語』の他巻に類例を見ない速度で描かれていることも、これと関係すると睨んでいる。

(16) 今読み直してみると、注(13)の小林論も、多分にその傾向が見られる。

(17) 名称から分かるように、天人女房譚は女房(=嫁)になるのが基本。

(18) 注(13)と同書二四二頁。

(19) 男踏歌とは宮中を出発して貴顕の家々を巡り、その場所を言祝ぐ行事であることの詳細は、注(2)の拙稿を参照のこと。

(20) 『源氏物語評釈』第六巻二六五頁下段。

(21) 因みに最も新しい注釈書である『源氏物語の鑑賞と基礎知識』三七巻真木柱(至文堂　二〇〇四年)も同様の見解を採る(一二七頁　鑑賞欄)。

(22) 山中裕「六条院と年中行事」(『講座源氏物語の世界』第五集　有斐閣　一九八一年)。

(23) 詳細は注(2)の拙稿を参照のこと。なお、男踏歌が臨時行事であることは、その後、袴田光康が、「男踏歌と宇多天皇―『源氏物語』における〈帝王〉への回路―」(『源氏物語の史的回路―皇統回帰の物語と宇多天皇の時代―』　おうふう　二〇〇九年)によって、院生であった稿者の雑な調査を補完してくれ、『源氏物語』の男踏歌が玉鬘とともにあることは、拙稿に対する言及はないが、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.18　初音・胡蝶・螢(至文堂　二〇〇一年)七四～七五頁の原豊二による小論文「男踏歌」でも指摘されている。

(24) 伊藤博「「野分」の後―源氏物語第二部への胎動―」(『文学』　一九六七年二月)

(25) 例えば、野村精一「六条院の四季の町」(『講座源氏物語の世界』第五集　有斐閣　一九八一年)等。

(26) これと同様のことをもう少し詳細に述べたものが常夏巻に次のように存在する。

かぎりなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、我心ながらえあるまじく思し知りたり。さてその劣りのつらにては、何ばかりかはあらむ。わが身ひとつこそ人よりはことなれ、見む人のあまたが中にか、づらはむ末にては、何のおぼえかはたけからむ。（三―一二頁）

（27）何故なら「奈具社」伝説のように、天人女房譚養女型の話は必ずしもその始発と終末に常に神変不可思議なことを有するとは限らないからである。

（28）「後記挿入」という語もあるが、稿者はそれを採らない。何故なら、今西祐一郎・室伏信助監修、加藤昌嘉・中川照将編集『テーマで読む源氏物語4　紫上系と玉鬘系―成立論のゆくえ』（勉誠出版　二〇一〇年）の「総説」で加藤と中川が書いているように、「鎌倉～江戸時代の写本を見る限り、『源氏物語』は、〝それぞれ個別のタイトルを持つ、複数の冊子体〟」であり、「「各巻の執筆順序も不明なら、読むべき順序も不明」なので、「武田宗俊の「玉鬘系後記挿入説」のうち、「後記」は妥当だとしても、「挿入」は不適当だ」（六頁）と稿者も考えているからである。また、増田繁夫も「源氏物語の成立」で言っている、「仮に、若紫グループが成立して一度読者の手に渡ったあとでは、作者はどのようにして挿入するのであろうか」（『解釈と鑑賞』第三四巻第六号　至文堂　一九六九年六月　三二頁）というのも、やはり分からないからでもある。

（29）拙著第一部第二章第四節。

（30）二〇二二年五月二十二日午前、専修大学神田キャンパスにおける発表。この原稿を書いている二〇二二年十一月現在ではまだ活字化はしていないとのことである。

（31）紫上に代わって春に賀を行ったのは玉鬘であるが、何故そうなるかは注（29）で論じた。

（32）夕霧は「六条院外の者」ではないという見方もあるかも知れないが、ふだん六条院には住まずに独立した家を持つ夕霧は、やはり「六条院外の者」と言っても良いはずであるし、夕霧を「六条院外の者」としたくなければ、花散里と共催という形もあり得たはずである。同様に、身分から明石御方が賀を主催するのは無理としても、明石女御を表に立てるやり方もあったはずなのに、それらの方法はいずれも採られていない。

（33）「源氏物語成立論の争点」（稲賀敬二コレクション3『『源氏物語』とその享受資料』　笠間書院　二〇〇七年）による。初出は一九六八年。

（34）楢原茂子「源氏物語第一部成立史並びにその評価」（吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』　笠間書院　一九七七年）

（35）注（28）の書二四四頁。

（36）注（33）の書三五頁。

（37）藤井貞和『源氏物語論』（岩波書店　二〇〇〇年）第六章　紫上　第三節　紫上系と玉鬘系の二五九～二六〇頁から抜粋。

（38）注（37）の書二六〇頁。

（39）そういう意味では、中川照将の「この事実（＝紫上系に登場する人物と玉鬘系に登場する人物が相違すること：稿者注）を覆した研究者は、未だ一人もいない」という評言（注（28）の書二四五頁）は聊か不適切ではなかろうか。「事実」はあくまで「事実」なのであり、誰にも覆せないものと思うが、「玉鬘系後記説」はその「事実」にもとづく一つの「解釈」にすぎず、それはこの書にも掲載されているように、既に何人かによって覆されていると言えるはずである。その「解釈」が成立しないなら、注（37）の藤井のように、別の「解釈」を立てれば良いだけの話である。